

構造主義からの小学校社会科歴史学習の設計

—「石見銀山から江戸幕府をみる～江戸システムの確立」の授業設計—

Designing a Social Studies History Lesson of Elementary School based on the Structuralism:
Lesson Planning of “Inquiring for a System of Edo through a Silver Mine in *Iwami*”

紙 田 路 子
(大田市立仁摩小学校)

I. 問題の所在と研究の目的

現代社会の風評・思想・批判を受けて、歴史的事象に関する教科書記述は、教科書改訂の度に改変を余儀なくされている。そうした現状を前にして、私たち現場教員は絶えず「この歴史認識でいいのか」「決まった視点からの価値観・思想を注入しているのではないか」という危惧にとらわれている。

歴史認識はしばしば「現在の意味を知るために過去に問いかける」という言い方がされる。したがって過去は現在に意味を送り込むかぎりで見事にみ出される。その光は現在から発しているものであって、現在の社会認識の変容によって歴史認識も変容せざるを得ない状況に陥る。

こうした歴史学習の問題点を受けて多くの小学校歴史学習についての分析や問題の提示、改善の方略がなされてきた。その多くは、さまざまな視点から歴史的事象を捉えさせ、歴史の客観化をはかろうとするものである。しかし、「歴史上の人物になったつもり」でとらえた歴史認識もその視座は、やはり現在の社会構造にあり、その結果、歴史認識は、合理性を持たない主観的なものに陥ることが多い。

社会の形成者たる市民的資質の育成に必要な歴史認識とは、主観的に歴史をとらえる歴史学習ではなく、むしろ主観から離れ、歴史的事象の背後にある「集合的思考」つまり〈構造〉を抽出すべきものではないだろうか。過去の〈構造〉を認識することではじめて、自分の置かれている現在の〈構造〉を相対化し、その価値観の是非を問い直すことができるのではないだろうか。

以上のような課題に立ち、本研究では「江戸シ

ステムの解明」を題材に歴史的事象の比較・分類を通して〈構造〉を抽出し、変革をめざす授業設計を試みる。

II. 構造の抽出と変革

構造主義にとっての〈構造〉とは、顕在的な現象として何が可能であるかを規定する、必ずしも意識されているわけではない、潜在的な規定条件としての関係性を意味する。近年では、静的な構造のみによって対象を説明することに対する批判から、構造の生成過程や変動の可能性に注目する視点が導入されている。

本研究の目的はこの構造の抽出と変動に視点を置いた授業を設計することである。

1. 〈構造〉の抽出

射影幾何学では、視点が移動すると、図形は別な形に変化する。そのときでも変化しない性質（射影変換に関して不変な性質）を、その図形の一群に共通する「骨組み」のようなものという意味で〈構造〉と呼ぶ¹⁾。〈構造〉はそれらの図形の「本質」のようなものではあるが、目には見えない。その意味で抽象的なものである。

同じ出来事を経験しても、一人ひとりが別々の視点を持ち、記述をする。その意味でひとつの歴史的事象からは〈構造〉は抽出できない。しかし、それらを比較・分類したときに、視点が変化しても変化しない法則が現れる。それが〈構造〉である。

客観的な歴史的事象があっても、その事象から「自ずと」事象を事象ならしめている「歴史の動力」が抽出される方法論を示した歴史家が、溝口雄三氏である。溝口氏は歴史的叙述を、事実記録

の確かな「光景」の記述と、事実記録なしの「動力」といういわば見えざる歴史の叙述に分け、その客観実証性の違いを言及している。²⁾ この事実記録なしの「動力」こそが〈構造〉である。

これまでの歴史学習は歴史的事象、すなわち「光景」を時系列ごとに並べる学習、もしくは自己の立てた仮説（この仮説の基盤こそが、現代社会の〈構造〉である）に都合のよい資料を集め、歴史的事象を説明しようとする学習にはなっていないだろうか。

本研究では個々の歴史的事象をマトリクスにしたがって分類し、比較・分析することで「江戸システム」の〈構造〉の抽出を行う授業設計を提案する。

2. 〈構造〉の変革

アナル学派の歴史学者のド・セルドーは、エリート文化のヘゲモニーに服従せざるをえない民衆たちが、支配文化のただなかで行うブリコラージュというやり方にこそ、民衆的なものと特徴づける独自性が現れているという。ブリコラージュとは、限られた持ち合わせの雑多な材料と道具を間に合わせて使って、目下の状況に必要なものをつくることを指している。ド・セルドーは「支配文化のエコノミーのただなかで、そのエコノミーを相手に『ブリコラージュ』をおこない、その法則を、自分たちの利益にかない、自分たちの規則に従う法則に変えるべく、こまごまとした無数の変化をくわえている」と述べている。³⁾

個々の社会的事象は、固定化された一義的な部分ではなく、多義性を持つ。そのときどきの状況によってひとつの構造をなしたり、別の構造を構成したりする有機的な存在である。つまり、個々の社会的事象の意味するものの変換を行い、組み替えを行うことで、元の姿とは全く異なる構造や法則を作り出すことができる。この変換は支配—被支配関係を逆転させる可能性を持つ。

幕藩体制の強化のために成立した通貨制度は、商業資本を発達させ、何もかも通貨を媒体としなければ成立しない社会を作り出した。この結果、武家は町人に代表される資本家の実質的な支配下に組み込まれていく。

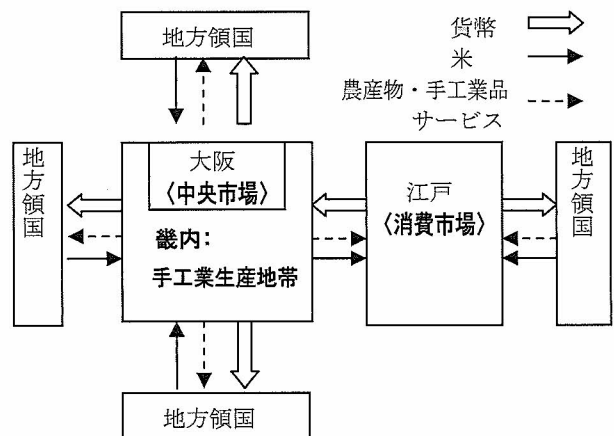
本研究では、この過程を授業設計に組み込む。

Ⅲ 江戸システムの抽出と変革

1. 「江戸システム」についての考察

ヨーロッパが植民地支配と産業革命によって近代経済システムを作りあげていた時に、日本はまったく別のアプローチによって、もう一つの近代経済システムを育てていた。これを江戸システムと呼ぶ事がある。江戸システムをそれ以前の社会システムと比べたとき最も重要な相違は、市場の役割が格段に大きくなって、社会の各層の日常生活に浸透していったことである。幕藩体制そのものが、一定の市場経済の展開を前提としていた、と鬼頭氏は指摘する。その理由として次の点があげられる。

- ① 年貢は米納年貢が原則であり、この米納年貢は、販売する市場の存在を前提としてはじめて可能なシステムであった。
- ② 村落と都市に分住する諸社会集団の間で、恒常的な商品と貨幣の交換が必要とされた。
- ③ 江戸は巨大な武士人口を抱えて、その需要を満たす必要から巨大な消費市場だった。
- ④ 江戸に対して、大阪、京都、奈良などの畿内諸都市は、伝統的な高度な生産技術と全国の物資を集散する中央市場の機能を備えていた。全国に流通する貨幣の発行は幕府におさえられていたので、諸藩は正貨を獲得するために領国外の市場、特に大阪の米市場で年貢米を販売しなければならなかった。⁴⁾ 【図2】



【図2 江戸前期の地域間経済循環構造】⁵⁾

生産と消費の間の懸隔を埋め、効率的な生産と消費を促すのが市場の役割である。市場の発達は、2つの側面で重要である。

ひとつは市場の存在が農民の生産目的に、「販売」という要素を持ち込んだことである。これにより効率的な生産が要求されるようになり、土地の有効な利用が進み、農業生産力が向上した。副次的にその土地の風土に適応した商品作物が生産されるようになったのはその一例であろう。その結果、停滞的な荘園制下の経済が変質し、成長が始まる。

第2は、市場経済化は封建領主の支配領域を超えるモノ・ヒト・情報の交流を促して、地域統合を推進する役割を示したことである。遠隔地間の取引が為替によっておこなわれたこと、年貢物や商品の輸送、保管に携わる業者、高利業をおこなう金融業者が活躍し、港湾都市が全国的に成長するのもこの時代である。

このような江戸システムは、歴史的事象をミクロにとらえ、比較・分析することで明らかになる。

2. 「江戸システム」の抽出

小学校段階では、観察・見学して事象を記録する学習をよく行っている。「なぜ」と問いながら、直接経験によるミクロな情報収集を行い、それを比較・分類し、話し合いを通して〈構造〉を抽出することができる。またミクロな情報は常に多義性を帯びている。〈構造〉の抽出を行うためにはミクロな情報は不可欠である。本研究では、江戸システムの〈構造〉抽出の題材として、「石見銀山」を取り入れた。

その理由として次の点があげられる。

- ① 石見銀山の「採掘」「製錬」「開発・経営」「運輸」の移り変わりは、市場経済へと移行していく江戸システムの特徴の一端を表している
- ② 大久保間歩や石銀地区、仙の山などの史跡は、比較的当時のままの姿で保存しており、当時の人々の日常生活を生き生きと伝えている。子どもたちが興味・関心を持って学習に取り組むことができる。

石見銀山の史跡や資料に触れることを通して、「どうやって銀を掘っていたのだろう」「銀をどうやって鉱石から取り出していたのか」「精錬された銀はどこへ運ばれどうなったのだろうか」と子どもは様々な疑問を抱くであろう。調べ学習を通して獲得されるであろう情報を比較・分類し「石見銀山」を分析したものが【資料1】である。横軸は時間の流れを、縦軸は「採掘」「製錬」「開発・経営」「運輸」という「石見銀山」の要素を配置したマトリクスを作成した。

その結果「江戸時代には安定的な銀の供給を維持するために、採掘・製錬の技術、効率的な鉱山経営・運上のシステム、輸送経路の整備等が発展した」という〈構造〉が抽出される。幕府は、銀を安定的に確保するため、銀山を直轄地とし、積極的に銀山の経営に乗り出したと思われる。この時代から本格的に国内で貨幣を鑄造され、貨幣制度が整えられた。(大判、小判、一分判の金貨、丁銀、豆板銀)貨幣を用いることで、空間、時間、条件、価値観を超えたより広い範囲での物々交換が可能となり、市場のネットワークが広がった。その結果「貨幣があればなんでも手に入れる」ことができるようになり、貨幣は「必要な商品を手に入れるための手段」としてではなく、人々の直接の欲望の対象に変化した。そして、より多く貨幣を獲得することを目的に各地域に特化した手工業や作物栽培が行われるようになった結果、生産性が高まっていった。また年貢物や商品の輸送、保管に携わる業者、高利業をおこなう金融業者が次第に力を持ち、実質的に武士を支配するようになった。

石見銀山の〈構造〉の抽出からこのような江戸時代の社会を垣間見ることができる。

3. 「江戸システム」の変革

「参勤交代」「三貨制度」「天下普請」は江戸幕府の大名統制の政策であった。

「天下普請」は天下人が城郭や都市の建設、社経営、治水などの土木・建築工事を大名に命じたものである。織田信長や豊臣秀吉の時代からみられるようになったもので大名をコントロールする最も有効な方法のひとつであった。工事に際し

【資料1 石見銀山のマトリクス】

	大内氏	毛利氏・豊臣氏の共同管理	江戸時代	特徴
採掘	品位の高い銀石が集まっている露頭(銀脈の先端部が地表に露出した状態)を探して採掘を行う。(露頭ばり)	露頭は銀脈の最先端であるため、開発が進むにつれて、次第に銀脈を追って坑道が地中へ掘り進んでいくようになる。(つ押し)しかし、この方法は銀脈を追って掘り下がるため、湧き出す地下水の排水には不便であり、地下水がたまると良鉱があったもやむを得なく放棄しなければならなかった。	坑内水処理のために排水をかねた水平坑道である「横合」という方法がとられるようになる。銀脈のはしっている方向をあらかじめ調査し、その走る方向に直角に坑道を掘る。「横合」には、銀脈の位置を予想する測量技術の発展や採掘技術の進歩がみられる。 ・湧き上がる地下水を処理するために、水吹きというポンプを使って地下水をくみ上げていた。 ・「けだえ」や「よろけ」という鉱山特有の病気にかかると人がいたため唐薬などを使って、採掘場に風邪をおくるとして通風対策に努める。	・次第に地表に近い部分にある銀鉱石が掘り出されなくなっていた。そのため、効率的に銀鉱石を量産するための採掘技術が進んだ。
製錬	採掘された銀鉱石は当初は製錬がおこなわれず銀石のまま、博多あるいは朝鮮半島に送っていた。輸送コストがかかるため、高品位の銀石以外はその対象とならなかつた。	素吹でできた鉛と銀の合金を、動物物の灰を使って分離する「灰吹き法」により製錬の技術が進展する。当初の灰吹き法は鉄鍋の中に動物物の骨で作った灰をつめて炉としていた	・地面を掘ったところに松葉を敷いてつくった灰をつめて、炉を築く方法に変わる。 ・さらに純度をあげるために清吹あるいは裏目吹という工程で同様の作業を行った。	銀鉱石から純度の高い銀を取り出すための技術が進んだ。
開発・経営	山の採掘が行われた仙の山に対峙する要塞山の山吹城などの山城を舞台に争奪戦が行われ、銀山の領有はめぐるしく変わった。戦乱期ではあったが、銀の生産現場自体が戦場となることはなく、そのまま生産活動が営まれていた。	毛利氏による銀山の支配は、銀の生産量に関係なく、あらかじめ毛利氏が運上頭を銀山奉行に指定し徴収を命じられた現地の銀山役人が、銀山経営者、運送業者、商人など業種別の代表者に運上金の納入を指示するという間接的な支配を行っていた。	銀山を開発する場合には、代官所が届け出てその許可を得てから、稼行が行われた。奉行所直営で開発が行われることもあった。稼中に銀脈の切り取られたと、代官所に届出を行い、代官所の立ちあいのもと、採掘される銀石の量と銀の品位を調べ、それを基本に所定の期間内の運上銀を決め、山師の入れによって稼行人を決めた。 ・入れがない場合→御直番山 ・落札→請山 代官所では労働者の救済を目的に銀山御取用、御勘弁味噌、子供養育米を支給し保護政策を行っていた。	銀山では山師による独立的な経営が進められていた。しかし時代ともに積極的な鉱山開発を行い、効率的に運上金を徴収するために、幕府が銀山経営に介入し政治システムを整えてきた。
輸送	灘、古柳、鞆ヶ浦の港が、銀鉱石の積み出し港として使用される。 ポルトガルが中国で買い付けた生糸・絹織物・鉛などを持ち込んで銀に換え、東南アジアで香辛料を購入するという中継貿易を行う。	毛利氏によって温泉津に鵜丸城が築かれ温泉津や沖湊が銀の輸出港として使用される。	銀の輸送は中国山地を越えて尾道へ、そこから瀬戸内海を海で運んで大阪へという輸送ルートが確立する。大阪へ運ばれた銀は大阪銀座あるいは大阪御銀蔵に納められた後、その後京都銀座において幕府が発行する銀貨に鑄造された。	銀の利用方法(利用価値)に応じて、輸送ルートが変化した。
特徴	高品質の銀が豊富にあり、銀の採掘は積極的に行われていたが、採掘や製錬の技術や経営のシステムはまだまだ十分整っていない。	銀さえあれば、外国の様々な物資や火薬の原料である硝石を手に入れていることができたことから、銀の価値が高まる。そのため、採掘や製錬の技術や運上のシステムが進展し、銀を積み出す港が整えられた。	高品質の銀鉱石が採掘されるにつれて、銀を求めて深くまで坑道を掘り進め、高品質の銀を製錬する技術がますます進展する。また効率的に銀を徴収するための銀山経営のシステム、運上の仕組み、輸送経路も整う。	銀の価値が高まるにつれて、採掘・製錬の技術、効率的な銀山経営・運上のシステム、輸送経路等が発展した。

て必要な資金・資材・人員の一切を大名の石高に応じて供出させた。数年に一度の割合で命じられる天下普請によって、大名たちは巨額の財政支出を強いられたため、その強化の阻止に威力が発揮された。しかし天下普請は単なる幕府と諸大名の命令・服従関係ではなく、実際には市場原理に支配される形で技術や資材の取引が広く行われていた。それと同時に江戸と関東一円で重点的に「公共事業」が行われた結果、全国の名と江戸は水運による物資流通を通じて直結していった。日本列島規模で民間定期航路による廻船組織も完成した。このような物流網の発達が市場経済の発達に大きな役割を果たした。

勤交代も含めた江戸在府に必要な経費は、大名の実収入の50%~60%を占め、その費用は各大名にとって大きな負担となった。これらの財政支出のほとんどが貨幣で支払うものだった。参勤交代関係の義務的経費は大名財政の硬直化や慢性的な赤字体質の最大の原因になっていた。その反面、大名が苦しくなる分だけ、江戸での消費は拡大し、貨幣は町人層に吸収されていった⁶⁾。

関ヶ原で戦勝をおさめた翌年、徳川氏は慶長6年(1601年)全国を対象として貨幣制度(「三貨制度」)を定めた。それまで国内各地で流通していた貨幣を廃止して、すべて徳川氏鑄造の金銀貨幣に置き換えること、つまり「通貨統合」を行った。徳川氏が通貨発行権を独占し、幕府鑄造貨幣の全国通用に力を注いだのである。その目的は幕府による経済の統制である。その結果、より広い範囲での物々交換が可能となり、市場のネットワークが全国に広がった。

このように、幕府が権力を独占するためにつくったシステムは、町人が主人公の経済システムに組み込まれていく。そこでは信用取引と投機、金銀銅の変動相場、都市の商業資本によるプランテーション農業の経営などが高度に、しかも広範に繰り広げられた⁷⁾。個々の社会的事象の意味の変換により、構造の変化が起こったのである。【図3】

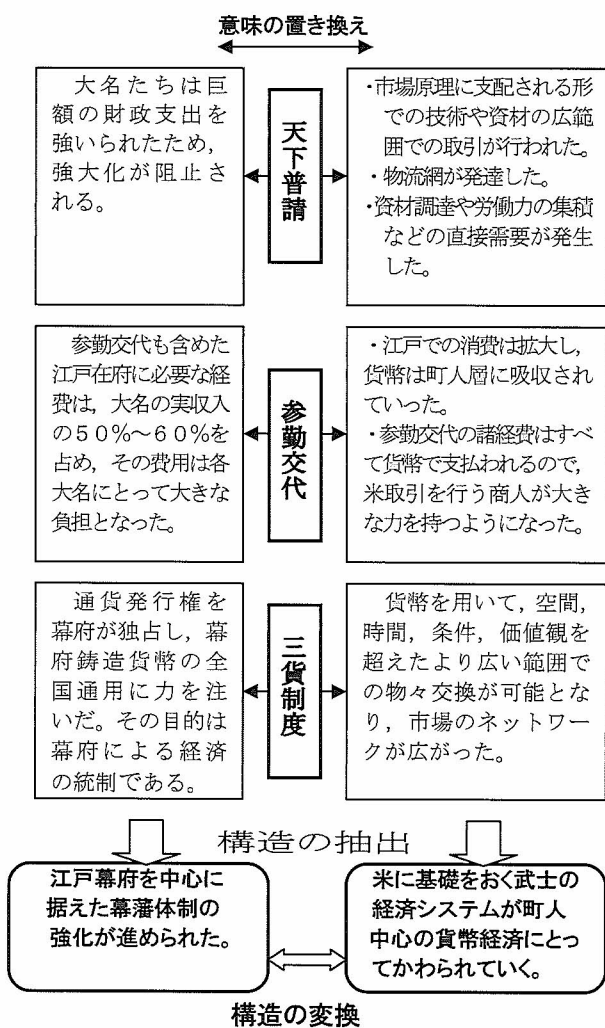
IV. 小学校第6学年「石見銀山から江戸幕府を見るー江戸システムの確立」の授業設計

〈構造〉の抽出・変革の方法に即して、単元を以下のように構成する。

〈第1次〉 石見銀山の秘密をさぐろう①

「石見銀山ではどのようにして大量の銀を産出していたのだろう」

石見銀山は一昨年「世界文化遺産」に登録され、子どもたちの関心も高い。石見銀山の文化価値としては、「16世紀後半から17世紀初頭にかけて世界の3分の1の銀を産出した」「日本でのシルバールッシュが銀の国際的な相場に影響を与えた」ことがあげられる。その石見銀山の中でも多くの銀を産出したのが「大久保間歩」と「釜屋間歩」である。「大久保間歩」は横合(鉾脈のはしって



【図3 江戸システムの変換】

「参勤交代」もまた大名統制のための基本的な制度である。各大名を原則として在府1年在国1年で、領国と江戸を行き来させるものである。参

る方向をあらかじめ調査し、その走る方向に直角に坑道を掘る)で掘られた間歩である。鉱脈にそって掘られた人ひとりようやく入る大きさの坑道や、坑道にたまった水、光がなければ一寸先も見えない闇の世界、夏でも11度の気温などを体感することを通して、「どのようにして銀を掘ったのだろう」「あんな狭いところで長い時間銀を掘る仕事は大変だ」「なぜそこまでして銀を掘るのか」「掘った銀はどうしたのだろう」など様々な疑問や感想を持つであろう。その感想をもとに石見銀山について課題を設定し、調査する計画を立てる。

〈第2次〉石見銀山の秘密をさぐる②

「江戸時代には安定的な銀の供給を維持するために、採掘・製錬の技術、効率的な鉱山経営・運上のシステム、輸送経路の整備等が発展した」

石見銀山について見学・体験活動から考えた疑問についてテーマ別に調べ、年代ごとに表にまとめる。それぞれの情報を比較・分類・分析することによって、「江戸時代には安定的な銀の供給を維持するために、採掘・製錬の技術、効率的な鉱山経営・運上のシステム、輸送経路の整備等が発展した。」という〈構造〉を共通理解する。

〈第3次〉なぜ銀は必要とされたのか—銀の秘密をさぐる

「貨幣制度を整え、正貨を安定的に流通させるため江戸幕府は銀の供給を必要とした」

戦国大名である大内氏、毛利氏、尼子氏は銀と外国と様々な物資や火薬の原料である硝石を交換することで、戦備の充実を図った(南蛮貿易)。そのため、銀山に近い温泉津に銀を積み出す港が整えられた。しかし、江戸時代になると貨幣制度が整い、銀は京都で鑄造された後、正貨として流通することになった。より安全な銀の輸送のために大森—尾道間の街道が整い、尾道から瀬戸内を通して大阪にいたる銀の輸送経路が確立した。この銀の使い方の変化を銀の輸送経路の変化を通して考察する。

〈第4次〉なぜ江戸幕府は貨幣を必要としたのか—貨幣の秘密をさぐる

「幕府の政策により江戸は多くの武士人口を抱える大消費都市となった。江戸に住む人々の消費を満たすため商品購入の手段としての貨幣と市場は

不可欠だった」

参勤交代制度により江戸が巨大な武士人口を抱える都市になったこと、武士の収入は年貢米であり貨幣に換金する必要があったことをおさえる。結果的にこれらの幕府の政策が江戸での日常の消費物資の大需要を生み出し、これらの需要を満たすために中央市場としての大阪が大きな役割を果たしたこと、商品購入の手段としての貨幣需要が恒常的なものになったことを確認する。

〈第5次〉貨幣の流通は何をもたらしたのか—石見銀地区の発掘品から考えよう

「貨幣が安定的に流通することで、広範囲での商品交換が可能となり、流通ネットワークが広がった。その結果、農村では農業生産力が向上し、都市では商人が活躍した」

石見銀地区では、瀬戸、伊万里、唐津、備前、信楽、美濃などいろいろな地方の陶磁器が発掘されている。それらがどこからどのように運ばれてきたのかを考えることを通して、大阪市場を中継点とした効率的な流通ネットワークが構築されたことを確認する。また流通ネットワークが整えられたことで、より広い範囲での売買が可能になりその結果、農民や職人が貨幣を得るためにより売れるよいものを作ろうとするようになったこと、都市において問屋や運送業を担う商人が活躍したことを知り、貨幣経済のメカニズムについて理解を深める。

〈第6次〉市場経済は万能か—石見銀山の盛衰から考える

石見銀の産出量の変化、石見銀山の人口の変化をグラフで読み取ることを通して銀の産出量の減少に伴い、人口が減少し、廃れていった石見銀山の姿をとらえる。その衰退の原因を考え、話し合うことで市場経済社会についての見直しを行う。

V. 研究の成果と今後の課題

本研究の成果として以下の点があげられる。

第1点は、身近な教材や体験から、歴史の〈構造〉を抽出する方法を示したことである。理論ばかりが先行し、子どもの経験や発見を考慮しない社会科授業設計が近年よく見られる。子どもは何かを理解するとき、「比較・分類」することで、

○単元の主な流れ

次	授 業 刺 激		予想される発言と獲得する知識
	発 問	資 料	
1 石見銀山の秘密をさぐろう①	<p>○一昨年石見銀山は世界文化遺産に登録されました。石見銀山の価値は何でしょう。</p> <p>○石見銀山で最も多く銀が産出された大久保間歩見学してみましよう。</p> <p>・大久保間歩を見学してどんなことを考えましたか。感想を発表しましょう。</p> <p>○石見銀山ではどのように銀を産出したのか。それぞれのテーマ別に調べてみましょう。</p>	<p>・大久保間歩の見学</p> <p>【学習資料】</p> <p>①「石見銀山歴史ノート」</p> <p>②「石見銀山戦国時代の遺跡を歩いてみよう」</p> <p>③「石見銀山ー銀ができるまで」</p> <p>④「石見銀山ー鉱山の技術と科学」</p> <p>⑤「石見銀山遺跡ノート」</p>	<p>・16世紀後半から17世紀初頭にかけて世界の3分の1の銀を産出した銀山。</p> <p>・日本でのシルバーラッシュが銀の国際的な相場に影響を与えた。</p> <p>・人の力だけであんなに大きな間歩が掘れるなんてすごい。どうやって掘ったのだろう。</p> <p>・あんなに暗くて狭いところで一日中銀を掘るなんて大変だ。</p> <p>・間歩の中は水がたまって寒い。銀をほる人は体をこわさなかったのだろうか。</p> <p>・掘った銀鉱石をどのようにして銀にしたのだろうか</p> <p>・銀鉱石を見つけるためにどのように間歩を掘ったのだろうか。(採掘の工夫)</p> <p>・銀鉱石からどのように銀を取り出したのだろうか。(製錬の工夫)</p> <p>・見つけた銀はどうなっていたのか。働いている人はどのくらい給料がもらえたのだろうか。誰が給料をはらっていたのだろうか。(経営システム)</p> <p>・銀はどこに運ばれたのだろうか。(銀の輸送)</p>
2 石見銀山の秘密をさぐろう②	<p>○調べたことをグループ別に発表しましょう。</p> <p>○採掘、製錬の技術や経営システムはそれぞれどのように変わってきたでしょうか。</p> <p>○江戸時代はどのように銀を産出したと言えるでしょうか。</p>	<p>・各グループで作成したポスターや新聞</p>	<p>(グループ別に発表する。【資料1を参照】)</p> <p>【採掘】</p> <p>・次第に地表に近い部分にある銀鉱石が掘り出されなくなっていった。そのため、山の内部から効率的に銀鉱石を量産するための採掘技術が進んだ。</p> <p>【製錬】</p> <p>・銀鉱石から純度の高い銀を取り出すための技術が進んだ。(灰吹法の導入)</p> <p>【経営システム】</p> <p>・銀山では山師による独立的な経営が進められていた。しかし時代とともに、積極的に鉱山開発を行い、効率的に運上金を徴収するために、幕府が銀山経営に介入する政治システムが整ってきた。</p> <p>○江戸時代には安定的な銀の供給を維持するために、採掘・製錬の技術、効率的な鉱山経営・運上のシステム、輸送経路の整備等が発展した。</p>
3 なぜ銀は必要とされたのか	<p>○なぜ、戦国大名や江戸幕府は銀を必要としたのだろうか。</p> <p>○銀はどこを通過してどこに運ばれたのだろうか</p> <p>○江戸時代と戦国時代では銀の使い方どのような変化があるのだろうか。</p> <p>○なぜ銀を運ぶ輸送経路が変わったのだろう。</p> <p>○江戸幕府はなぜ銀を必要としたのだろうか。まとめてみよう。</p>	<p>資料1 「大森と鞆ヶ浦、沖泊を結ぶ銀山街道」</p> <p>資料2 「大森～尾道、瀬戸内を結ぶ銀の道」</p> <p>資料3 「三貨制度」</p>	<p>・戦国大名は戦争に必要な武器や弾薬を買うために必要だったのではないかと。</p> <p>・銀を所有することで、生活に必要なものを買ったり、ぜいたくをしたりしたのではないかと。</p> <p>・戦国大名である大内氏、毛利氏、尼子氏は銀と外国と様々な物資や火薬の原料である硝石を交換することで、戦備の充実を図った(南蛮貿易)。そのため、銀山に近い温泉津に銀を積み出す港が整えられた。</p> <p>・江戸時代になると大森ー尾道間の街道が整い、尾道から瀬戸内を通過して大阪にいたる銀の輸送経路が確立した。</p> <p>・江戸時代になると貨幣制度が整い、銀は京一旦大阪に運ばれた後、京都で製造され、正貨として流通することになった。(三貨制の成立)</p> <p>・江戸幕府は銀を外国に売るより、国内で貨幣にするために使った。</p> <p>・銀を運ぶ場所が変わったから。(毛利氏のときは主に博多に運び、江戸時代は大阪に運ばれた。)</p> <p>・海路より陸路のほうが安全だった。(戦がなくなり平和になったため)</p> <p>○貨幣制度を整え、正貨を安定的に流通させるため江戸幕府は銀の供給を必要とした。</p>

次	授 業 刺 激		予想される発言と獲得する知識
	発 問	資 料	
4 なぜ江戸幕府は貨幣を必要としたのか	<p>○江戸幕府はなぜ貨幣を必要としたのだろう。</p> <p>・江戸幕府の政策から考えてみよう。江戸幕府の政策にはどのようなものがあつたか。</p> <p>・江戸の人口は100万人を超えたといわれる。なぜそのように巨大な人口を抱えることになったのか。</p> <p>○巨大都市江戸には何が必要になったか。</p> <p>・生活物資をどのようにして調達したのか。</p> <p>・都市整備はどのように行われたか。</p> <p>・大名や武士は生活必需品や資材を購入するのに必要な貨幣をどのようにして手に入れたのか。</p> <p>○江戸幕府が貨幣を必要とした理由をまとめてみよう。</p>	<p>資料4 「参勤交代」</p> <p>資料5 「天下普請」</p> <p>資料6 「大名の収入」</p> <p>資料7 「江戸の人口と面積」</p> <p>資料8 「大阪市場の賑わい」</p> <p>資料9 「菱垣廻船」</p> <p>資料10 「茅場町の倉庫群」</p> <p>資料11 「いろいろな店が並ぶ、江戸日本橋の様子」</p> <p>資料12 「堂島の米市場」</p> <p>資料13 「石銀地区で発掘された陶磁器」</p> <p>資料14 「東廻り航路と西回り航路」</p> <p>資料15 「温泉津港と諸物資の供給」</p>	<p>・多くの武士を養うために必要だったのではないか。</p> <p>・お城を直したり町を整えたりするために必要だったのではないか。</p> <p>・生活に必要なものを買うために必要だったのではないか。</p> <p>・参勤交代の制度が確立し、諸大名やその家臣たちは、1年交替で江戸に住むことを余儀なくされた。</p> <p>・江戸城の改築や水路などの建設工事を各大名が負担した。</p> <p>・石高（土地の価値を玄米収量で示したもの）に応じて年貢米が徴収され、それが幕府や藩の財政になった。</p> <p>幕府の力を絶対的なものにするための政策がとられた</p> <p>・諸大名やその家臣たちのほかに、幕府直属の武士である旗本、御家人も江戸に住んだ。そのため江戸は巨大な人口を抱えることになった。</p> <p>・生活物資。</p> <p>・都市整備。</p> <p>・大阪には全国各地から、様々な農産物、手工業品が集まり、「天下の台所」と言われた。</p> <p>・大阪から江戸にこれらの物資が運ばれ、売買がされた。</p> <p>・これらの商品の売買には貨幣が必要だった。</p> <p>・都市の整備は、各藩の大名が負担した。</p> <p>・普請に必要な資材は購入しなければならなかった。そのため大量の貨幣を必要とした。</p> <p>・全国に流通する貨幣の発行は幕府におさえられていたので、諸藩は年貢米を販売し、貨幣を獲得しなければならなかった。</p> <p>・武士も年貢米を貨幣と交換して生活費用にした。</p> <p>○幕府の政策により江戸は多くの武士人口を抱える大消費都市となった。江戸に住む人々の消費を満たすため商品購入の手段としての貨幣流通と市場が活性化した。そのため江戸幕府は貨幣を必要とした。</p>
5 貨幣の流通は何をもたらしたのか	<p>○商品を買うために貨幣が必要だったのは、江戸だけだったのだろうか。</p> <p>・石見銀山の近くにできた都市である石銀地区の発掘品である。これらは瀬戸、伊万里、唐津、備前、信楽、美濃の陶磁器である。これらは石見銀山にどのようにして運ばれたのだろうか。</p>	<p>資料13 「石銀地区で発掘された陶磁器」</p> <p>資料14 「東廻り航路と西回り航路」</p> <p>資料15 「温泉津港と諸物資の供給」</p>	<p>・江戸だけではなく他の地域でも、生活に必要なものを買うために貨幣は必要だったのではないか。</p> <p>・菱垣廻船や樽廻船、北前船に全国各地のいろいろな商品が積み込まれ、各地で売買されていた。それらの商品を売買するには貨幣が必要だ。だとしたら地域にも貨幣が入ってきたと思う。</p> <p>・その地域にはないもの（他の地域の生産物）を買うために貨幣が使われたのではないか。</p> <p>・それぞれの地域から、中継地に集められ船に積み込まれた商品が沖泊に運ばれた。</p> <p>・温泉津の沖泊には大きな港があり、廻船が入港していた。</p> <p>・ここからいろいろな物資が入り、大森に運ばれた。</p> <p>・商人が商品を集めて輸送し売買するので、生産者同士が商品を直接交換することはできない。</p> <p>・商品のやりとりには貨幣が必要になる。</p>

	<p>○江戸時代日本各地はどのように商品を売買していたといえるだろうか。</p> <p>○このような商品と貨幣の流れができた結果、農村や都市にどんな変化があらわれただろうか</p> <p>○貨幣の流通は社会にどのような変化をもたらしただろうか。</p>	<p>資料 16 「広がる取引」 資料 17 「各地の特産品」 資料 18 「力を持つ商人」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東回り航路、西回り航路が開通し、日本各地の様々な農産物、手工業品を売買する商人が活躍し、全国的な商品の流通が活発になった。 ・農村では農民はより多くの貨幣を得るために、その土地にあった農作物・加工品の生産を工夫した。そのため生産力が向上した。 ・市場の拡大によって商品と商品を媒介する問屋や仲買人（商人）が力を握り、港町や城下町、中継地など都市が発達した。 <p>○貨幣が安定的に流通することで、広範囲での商品交換が可能となり、流通ネットワークが広がった。その結果、農村では農業生産力が向上し、都市では商人が活躍した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>○貨幣によって広い範囲で商品のやり取りができるようになった結果、貨幣を持てば何でも手に入るようになった。そのため貨幣を持つ商人が武士より力を持つようになった。</p> </div>
<p>6 市場経済は万能か</p>	<p>○石見銀山の人口の推移を見て気づいたことを発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銀の産出量の変化を見て気づいたことを発表しよう。 <p>○銀山で働く人が大森を出て行ったと考えられるが出て行ったのはそのような人だけだろうか。</p> <p>○その結果大森はどうなったのだろうか。</p> <p>○このことについてどう思うか。意見を述べよう</p> <p>○産業の空洞化の問題は、現代でも炭鉱を閉鎖した夕張市の問題や中間山地の過疎の問題としてあらわれている。現代に生きる私たちは、このような問題に対してどのように対応していくべきだろうか。意見を述べよう。</p>	<p>資料 19 「石見銀山領の人口の推移」 資料 20 「石見銀山の銀の産出量の変化」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・石見銀山領の人口は慶長を境に年々減少している。 ・なぜ、だんだん人口が減ってきたのだろうか。 ・銀の産出量も年々減っている。 ・銀がとれなくなったから、銀の産出にかかわる人の仕事なくなった。そのため、貨幣を得ることができなくなり、人々は大森から出て行った。 ・銀鉱山で働く人を相手に商売をしていた人たちも出て行った。 ・銀山に必要な物資を運ぶ人たち。 ・港で荷物を降ろしたりして働く人たち。 ・住む人がいなくなって廃れた。 ・昔のような賑わいはなくなった。 ・さびしい町になった。 <p>【①現状の肯定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銀がなくなったのだから廃れても仕方がない。世の中のしくみはそういうもの。 <p>【②現状の社会システムの中での変革を目指す】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・銀山ばかりに頼るのではなく、銀がなくなったときのことを考えて、別の農産物を作ったり、手工業品を開発したりすればよかった。 <p>【③現状の社会システムその自体的問題化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貨幣を多く得るために売れるものだけ生産して、広い範囲で取引するというシステム自体おかしい。本当に生活に必要なものだけ、手に入れることができるようなシステムを作るべき。地域を捨てるのはよくない。 <ol style="list-style-type: none"> ① 地域が廃れていかないためには、地域住民が、新しい産業を興したり、売れる農産物を作ったりする努力が必要である。努力をしない地域は競争で負けて廃れていく。それは仕方がない。 ② 産業を興したり、新しい農作物を栽培したりするにはお金や時間、技術が必要になるので地域住民だけでは難しい。政府や民間団体の支援が必要になるのではないかな。 ③ そもそも「売れるものを作って生活をしなければならぬ。」という現在の社会システム自体おかしい。生活に必要なものがあればよいのだから、「地域で作ったものを食べる」ようにもっと狭い範囲で物のやり取りができるような循環システムを作ればよいのではないかな。「地産池消」や「スローフード」「スローライフ」の運動はそのあらわれといえる。

概念を獲得し知識を蓄積していくと言われている。よって彼らが歴史を理解する源になるのは彼らの経験である。自分の経験と過去の人々の経験を比べ「なぜだろう」と疑問を抱いたときにこそ、彼らの歴史学習は始まる。現在の自分の経験と比較しやすいのは庶民の生活であろう。時代の著名人ばかりを取り上げるのが歴史学習ではない。庶民の生活をよりミクロな視点でとらえ、分析することにより、その時代の〈構造〉をよりリアルに理解することができるのである。

第2点は、歴史学習に経済的な視点を取り入れたことである。貨幣は一般的な交換の媒体であることに加えて、最大の「流動性」を持つ価値の保蔵手段である。貨幣は、商品世界にあるすべての商品との直接的な交換可能性を与えられている。そのため、貨幣経済が浸透すると、人は貨幣が代替する商品ではなく、貨幣そのものを求めて行動するようになる。現代ではさらに、貨幣をめぐる「株取引」や「先物取引」「証券取引」などさまざまな形態の金融取引が発達している。「貨幣」が「貨幣」を増殖するマネーゲームが世界を舞台に繰り広げられることになったのである。歴史学習において、「貨幣とは何か」を認識することは、金融問題についての理解を促すことになる。

第3点は、構造の変革の視点を取り入れたことである。個々の社会的事象の意味するものの変換を行い、組み替えを行うことで、元の姿とは全く異なる構造や法則を作り出すことができることを、授業設計において示した。歴史はただ与えられた、変更不可能なストーリーではなく、その時代時代を生きる人々の集合的思考によって変革されるものである。歴史に対するこのような考え方は現実社会に対して積極的に働きかけていく子どもを育てていくであろう。今後はこの「変革のブリコラージュ」の視点を「合理的意思決定」の場面にも取り入れる授業設計を行いたい。

【注】

【引用文献】

1. 橋爪大三郎『はじめての構造主義』講談社現代新書, 1988, pp168-169
2. 溝口雄三「歴史叙述の意図と客観性」(渡辺雅子編著『叙述のスタイルと歴史教育 教授法と教科書の

国際比較』三元社, 2003, p.261

溝口氏は「見えざる歴史の叙述」について以下のように述べている。「これは蜘蛛から糸がでてくるように、事実の中から出ている見えない意図で織り成された、事実から出たフィクションであって、小説家のフィクションのように作者の想像力や登場人物の感性から生み出された創作のフィクションではない。(中略)それは、歴史家の一切の叙述意図を受け付けない。歴史家の意図を超えてそこに厳然として存在しているフィクショナルな世界である。」

3. 小田 亮『レヴィ=ストロース入門』ちくま新書, 2000, 前掲書, p.151
4. 鬼頭 宏『文明としての江戸システム』講談社, 2002, pp.205-206
5. 鬼頭 宏, 前掲書, p.209
6. 鈴木浩三『江戸の経済システム』日本経済新聞社 1995 p.46
7. 鈴木浩三, 前掲書, p.1

【参考文献】

1. 『週刊日本の街道88 石見銀山街道』講談社, 2004
2. 銀の道振興協議会『石見銀山 歴史ノート』1999
3. 仲野義文『石見銀山～鉱山の技術と科学～』大田市外2町広域行政組合, 2000
4. 大田市外2町広域行政組合『石見銀山～戦国時代の遺跡を歩いて見よう』1999
5. 銀の道振興協議会『石見銀山～銀ができるまで』1998
6. 仲野義文『石見銀山～野外手帳～』大田市外2町広域行政組合, 2002
7. 多田房明『銀山街道ガイドブック』大田市外2町広域行政組合, 2002
8. 石見銀山資料館編集『石見銀山学習資料—私たちの石見銀山』2007
9. 仲野義文『石見銀山遺跡ノート』大田市外2町広域行政組合2002
10. 山陰中央新報社『輝き再び石見銀山 世界遺産への道』1998
11. 林 玲子・大石慎三郎『流通列島の誕生』講談社現代新書, 1996
12. 林 玲子編『日本の近世5 商人の活動』中央公論社, 1992
13. 丸山擁成編『日本の近世6 情報と交通』中央公論社, 1992
14. 岩井克人『貨幣論』筑摩書房, 1993
15. 仲正昌樹『お金に正しさはあるのか』ちくま新書, 2004
16. 森 元孝『貨幣の社会学 経済社会学への招待』東信堂, 2007
17. 江面龍雄「鉱山経営の実態—石見銀山の場合」『歴史公論7』, 1976
18. 小葉田 淳「江戸時代の鉱山業」『歴史公論7』, 1976